

近未来 SF 映画のテクノロジー表現からみた生活環境のイメージ

奥山研究室 09_18867 橋本 かをり (HASHIMOTO, Kaori)

1. 序

近未来の都市を舞台とした SF 映画（近未来 SF 映画）では、発達したテクノロジーが生活環境の中で特徴的に描写されたメディアのひとつである。その中では建物の部位と融合したテクノロジーや小型化され携帯可能なテクノロジーなど様々な表現が登場人物の描写とともに表現されている。こうした SF 映画の表現には、テクノロジーが様々なかたちで浸透した近未来の生活環境を読み解くことができる。そこで本研究では、近未来の都市を舞台とした SF 映画を資料とし、テクノロジーと環境との一体化の度合いをその内容と描写形式から検討することで、今後想定される生活環境のイメージ形成の枠組みの一端を明らかにすることを目的とする。

2. テクノロジーの内容

資料とした SF 映画¹⁾ からテクノロジー²⁾ を抽出し、それが描写された一連のシーンをもとにテクノロジーの内容を検討した（図 1）。

2-1. テクノロジーが用いられる場所 まず、それぞれのシーンにおいてテクノロジーが用いられた場所を、「居住空間」「都市空間」の 2 種類に大別し、さらに「都市空間」

をその公共的性格の違いから「公的空間」と「非公的空間」に分類した（図 2）。またこれら複数の場所で用いられるテクノロジーを「場所横断」とした。

2-2. テクノロジーの表出形式と機能 テクノロジーの内容は、それが空間や環境の中でどのように表出するか（表出形式）と、その機能から捉えることができる。表出形式は生活環境の先進的な度合いを示す指標と考えられるテクノロジーの形状およびポータビリティから検討した。形状は、建築部位や他の物体と一体化し形が不明瞭な《融合》と、明確な形をもつ《独立》の 2 種類に大別し、ポータビリティはその有無により《可動》《固定》として位置づけた（図 3）。テクノロジーの機能はその使用目的から日常技術と専門技術として大きく捉えることができ、その両方の性格をもち得る情報技術を特別なものとして位置づけた。（図 4）。ここで、テクノロジーの機能ごとに表出形式および使用される場所の割合を検討した（図 5）。日常技術および情報技術において《融合》かつ《固定》の割合が高かった。このことから、日常的に用いられる家電や防犯システムなどの情報技術は壁や床、家具などと一体化し不可視化される傾向を示すものといえる。



図 1 分析例

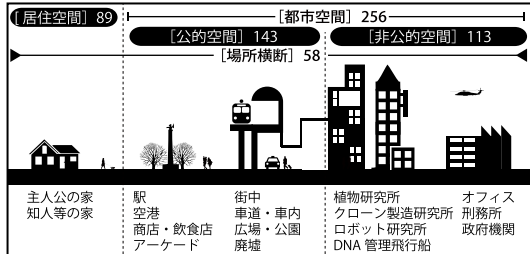


図 2 テクノロジーが用いられる場所(括弧内の数字はテクノロジーの数を表す)

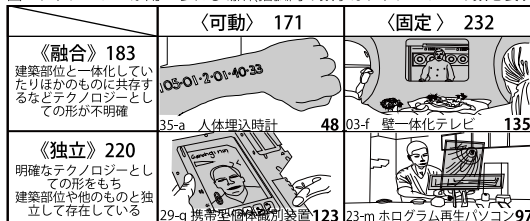


図 3 テクノロジーの表出形式

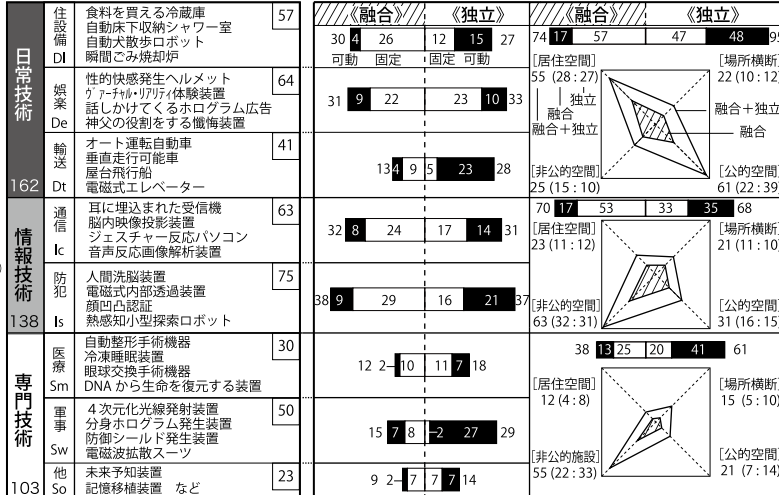


図 4 テクノロジーの機能

図 5 テクノロジーの機能と表出形式の関係

3. 描写形式からみた生活環境のイメージ

3-1. テクノロジーの描写形式 テクノロジーの表出が、その前後と関係して一連の流れの中で描写されるか否かでテクノロジーの生活環境への浸透が異なると考えられる。そこでテクノロジーが用いられるシーンの前後における場面転換³⁾の有無を検討した(図6)。テクノロジーが一連のシーンの中で自然に描写される【フェードイン型】と、場面転換の直後にテクノロジーが描写される【カットイン型】の2種類で捉え、これをテクノロジーの描写形式とする。

3-2. テクノロジーの内容と描写形式 2章で整理した内容をテクノロジーが用いられた場所ごとに描写形式と合わせて検討した(図7)。「居住空間」では【フェードイン型】が多くみられ、その内訳に着目すると、「居住空間」では《融合》と《独立》は同程度みられた。このことから「居住空間」で用いられる場合はその表出形式によらず環境に融け込むように描写される傾向があるといえる。また、「公的空間」では【カットイン型】が多くみられ、《独立》が多く、機能の内訳をみると輸送が多くみられた。このことから「公的空間」ではテクノロジーが環境と切り離されたものとして、そのものの特殊性が強調して描写される傾向があるといえる。また、全体数は少ないが、「場所横断」では【フェードイン型】が多くみられ、機能の内訳は「情報技術」が多かった。このことから防犯技術などがあらゆる場所に張り巡らされ環境に融け込んだ

ものとして描かれていたといえる。

ここでテクノロジーが用いられる場所における表出形式および機能の割合を通時的に検討した(図8)。その結果、「都市空間」は表出形式の割合に大きな変化が見られなかったのに対し、「日常空間」では近年にかけて《融合》の割合が増加していた。このことから、テクノロジーの表出形式からみた都市空間のイメージは80年代以降定型化しているといえる。また、住空間は、90年代後半からテクノロジーが浸透した場所として描かれる傾向がみられた。このことは、近年の情報技術の発展に伴った生活のイメージが近未来SF映画では住空間において反映されやすいことを示すものであるといえる。

4. 結

以上、本研究では近未来の都市を舞台としたSF映画を資料とし、そのテクノロジーの内容とその描写形式から、技術が浸透した生活環境のイメージを検討した。その結果、居住空間では目に見えない形で生活環境に融け込んでいくテクノロジーによって特徴づけられる一方で、都市空間ではテクノロジーが環境から独立し強調されて描かれるという対照的な傾向を見いだした。

註

- 1) 年代が明確に設定された、近未来都市を舞台としたサイエンスフィクション映画の中から、アカデミー賞やサターンSF映画賞などの著名な章を受賞した作品および興行収入の高かった2013年1月までにパッケージ化された36作品を資料とした。
参考文献/北島明弘:世界SF映画全史, 愛育社, 2006
- 2) ここでは科学技術全般を指し、原動機(機械・装置)や電気エネルギーを利用した機器の中で、2013年2月現在において一般には見られないものを抽出した。全36資料から403のテクノロジーが得られた。
- 3) ここではテクノロジーシーンに描写された場所がその前後で異なる場合、場所が同じであっても時間的な連続がないと判断できる場合を指す。

【フェードイン型】 233			【カットイン型】 168		
フェードイン/フェードアウト 164 フェードイン/カットアウト 68			カットイン/フェードアウト 78 カットイン/カットアウト 90		
具体例: 店員の代わりをするテレビ(No.11)			具体例: 空飛ぶ車(No.17)		
主人公が店に入る	店員の代わりをするテレビに注文	主人公、店内で談話	主人公自宅、客訪問	空飛ぶ車に乗り込む	主人公以外の人物が描かれるシーン

図6 テクノロジーシーンの描写形式

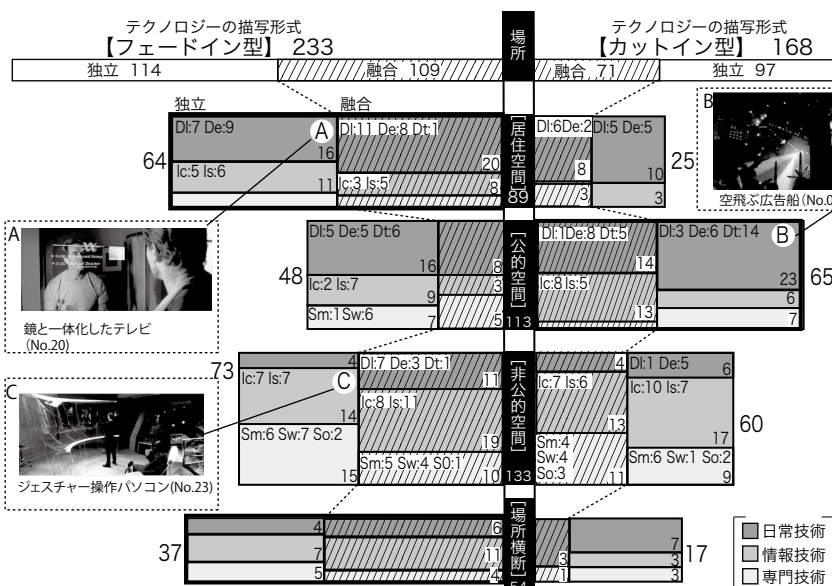


図7 テクノロジーの描写形式と場所との関係

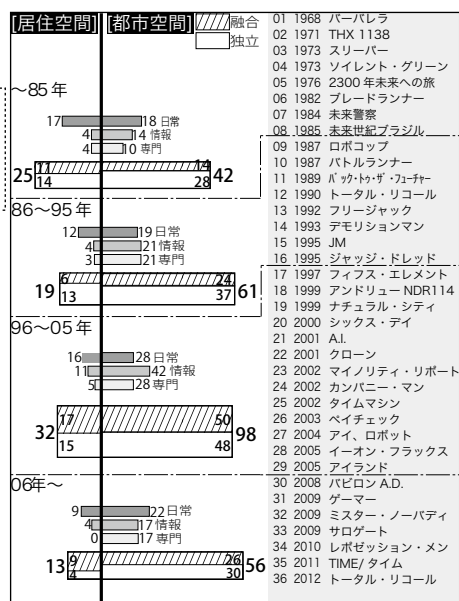


図8 通時的傾向